福島大学附属図書館報

書燈

No.39 2007.10.1発行

〒960－1293　福島市金谷川１番地
TEL（024）548－8083
http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/
携帯電話版
http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/i.htm

福島大学附属図書館

編集者という職業

経済経営学類教授　飯田　史彦

私は過去15年間に、20冊(共著や翻訳書も勘定すると30冊）を超える著書を出版してきたが、その経験を通じて思い知らされたことがある。それは、「出版物の編集」という職業に従事する方々の壮絶な仕事ぶりと、その恩恵に与ることのできる幸せである。

私の観察によれば、わが国で「編集者」を名乗る方々には、ひとつの「人種」として分類できるほどの共通特性がある。それは、精神的にも肉体的にも、並み外れた強靭さを備えていらっしゃるということだ。編集者の心身の強靭さに比べれば、我々のような研究者は(という表現で私と同一視して申し訳ないが)、まるで赤子の如く脆弱に映ってしまう。

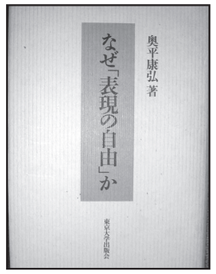
まずは、精神的な強靭さから見てみよう。編集という仕事の最大の特徴は、基本的に、自ら原稿を書くのではなく、「著者」を自称する他人に執筆を任せるという点である。この「人任せ」という点が、くせものなのだ。執筆を人に任せるというのは、楽なように思えて、実は大変なストレスになるからである。私の専門であるメンタルヘルス・マネジメントの観点から見ると、人間は、自分の努力で解決可能な問題に対してはストレスを感じにくく、むしろそのための努力は快楽にさえもなり得る。しかし、自分の努力ではどうすることもできず、他人の努力や好運に期待するしかない問題に対しては、多大なストレスを感じやすい。そして、「著者を名乗る（しばしば無能な）他人に対して、頭を下げ、叱咤激励しながら、締め切り期日までに最大限の努力を促し、より優れた原稿を書かせる必要がある」という編集者の使命は、まさに、後者に該当する深刻な問題状況の典型例なのである。

さらに、肉体的な強靭さについては、私が描写するまでもあるまい。出版経験をお持ちの方々ならばご存じのように、編集者は、深夜の10時、11時はもちろんのこと、しばしば、0時を過ぎても受話器の向こうに現れてくれる。そもそも、「残業」や「勤務時間」の概念はなく、疲れたら随時睡眠をとり、可能ならば時折帰宅しながらも、ほぼ毎日16時間近くは働いているのだ。しかも、我々研究者が最も苦痛としている、「校正作業」という極めて地味な業務が、その大半なのである。実際、多くの編集者が、「知的なムードに憧れて職に就いてみたら、実は大変な肉体労働でした」と、しばしば自嘲するではないか。

このように、著者という他人の尻を叩いて締め切りを守らせ、媚びたり叱ったりして優れた原稿を書くように仕向け、昼夜を問わず校正作業に明け暮れながら、寸暇を惜しんで著者と職場と印刷所の間を飛び回る……編集者という「人種」に属する方々は、心身共に、かくも並外れた強靭さを兼ね備えていらっしゃるのだ。そして、彼（彼女）らの献身的な仕事ぶりがあるからこそ、我々の研究や著作を、広く世に問うことが可能になるのである。

私は常々、編集者を志望する学生に、心底からこのように話して聞かせる……「君が、著者を思いのままに操るコミュニケーション能力と、過酷な校正作業に耐える辛抱強さと、毎日16時間働ける健康な肉体と、世の中のニーズを的確に捉える鋭敏な感覚と、たとえ内容が愚作でも名作風の装丁に仕立て上げる創造性を持ち、ベストセラーを狙って大勝負ができるだけのギャンブラーならば、この素晴らしい仕事を大いにお勧めするよ」と。

思い出の一冊『なぜ「表現の自由」か』奥平康弘著　行政政策学類　金井　光生



「思い出の一冊」といわれると大変困る。師事を決意した憲法学者：石川健治の著作にも感銘を受けたし、大学院時代に仲間と読んだカントの三批判書やヘーゲルの『法の哲学』も思い出深いし、野田秀樹やシェークスピアも尊敬しているし、昨年に人生で初めて上梓した拙著『裁判官ホームズとプラグマティズム』(風行社)も愛おしい。だが今回は、私が現在の道へ進むきっかけとなった憲法学の名著を取り上げよう。本書は戦後のアメリカ憲法学と表現の自由の第一人者の手によるもので、全８章からなり、それぞれが独立した研究論文の形を取っている。その中でも、第１章は本書全体に通底する憲法上の表現の自由についての原理論となっており、当時の最先端のアメリカの議論を紹介しつつ、著者独自の鋭い洞察力とスタイリッシュな筆致によって見事な思考が展開されている。憲法学といえば違憲審査基準をめぐる判例の分析ばかりが主流であった(そうでなければ、政治運動的であった)時代に、表面的な条文解釈や判例評釈に留まらない、哲学的な探究と実践的な法解釈とを結合させた本書は、誠に新鮮で衝撃的な研究であった。本書は、学生時代の私に、「表現」というものが人間にとっていかに重要であり、憲法によっていかに厚く保障されなければならないのかを納得させてくれた。と同時に、もともと哲学その他の人文主義的志向をもっていた私に、このようなアプローチで法を探究することができることも教えてくれた。法学専攻の方のみならず、広く表現・コミュニケーション・マスメディア等に興味関心がある方には(第１章だけでも)必読の書である。

カウンターの内側から　郝　　鋒（経済学研究科２年）

私が大学院１年生からカウンターの業務を勤めはじめて、そろそろ一年半がたちます。カウンター業務を通して様々な方と出会いして、色々なことを勉強させてもらいました。実際に仕事をやっていて、図書館のサービスに関して「ここは便利かな」とよく感じたところを簡単に紹介していきたいと思います。

多くの利用者から、「図書館にこの資料はおいてありますか、又はどこにおいてありますか」という質問をよく聞かれます。皆さんは図書館の情報検索についてあまり知らないようです。本館には蔵書検索端末７台をおいて、資料のタイトル、著者名、分類、全文など、様々な検索方法から資料の所蔵を確認できます。また図書館のwebサイトからの検索も可能です。自分が閲覧したい資料が図書館においてある場合、直接来館するという選択肢以外、福島市内に住んでいる方は「街なかブランチ」(チェンバおおまち)というサービス窓口にも申し込みして借りられます。これは非常に便利だと思いますが、まだまだ知らない方が多いようです。

利用したい本が貸出中のときは、図書館のカウンターとオンラインサービスで予約をすることができます。ただ一つ注意するところがあります。ＯＰＡＣで検索画面に「研究室貸出中」の表示が出ている場合には、これは研究用のため、使われている資料ですので、一般の方(学外者)は予約できません。ちょっと残念ですね。また福島大学にない本を利用したい場合、希望図書申込もできますし、レファレンスサービス(相互貸借、文献複写など)を利用して手に入れることもできます。初めての方はちょっと迷ったら、気軽にカウンターに声をかけてください。

現在パート職員を含めて、学術情報グループの職員が十数名、図書館の環境の改善、問題点の解決へ日々努力しています。ただ十数名の力に頼るだけで、すべての問題をうまく解決することができないです。手がまわらないところはたくさんあると思います。良い図書館づくりへのは、毎日来られる千人に近い利用者の方々のモラルや協力と緊密にかかわっています。人への思いやりの心を持って、皆さんの力を貸していただけませんでしょうか。

海外の図書館事情 ～マサチューセッツ工科大学～　共生システム理工学類　大山　大

大リーグのレッドソックスで松坂・岡島両投手が活躍し、日本人が知るアメリカ合衆国で最も有名な都市になった感のある街、ボストン。松坂投手らが渡米する前年、このボストン(正確にはチャールズリバーという川を挟んだとなり街のケンブリッジ)にあるMIT(Massachusetts Institute of Technology)に滞在していました。今や、スポーツで有名なボストンですが、ボストン界隈にはMITやハーバード大学をはじめ、60以上の大学が点在し、とてもアカデミックな街でもあります。

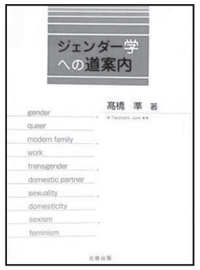
MITは、４千人の学部生(そのうち留学生7%)と６千人の大学院生(そのうち留学生35%)が在籍する「総合大学」です。工科大学なので理系の学部だけだと思われがちですが、Humanities, Arts, Social Sciences, Management等の文系学部もちゃんと存在します。私が在籍していた化学科の横には音楽系の学科があり、廊下に沿ってピアノが何台も置いてあったり、いろいろな楽器の演奏が聞こえてくることもしばしばでした。そういう環境の下で研究をするのはかなり新鮮でした(もっとも、ラボの中ではジャズなどが大音量で鳴り響いていましたが・・・)。

MITには５つの主要な図書館と５つの小規模な図書館があります。ジャンルごとに図書館が異なるため、自分の専門外の図書館には入ることはありませんでした。私が利用していた図書館はScience Libraryです。この図書館は上述したチャールズリバー沿いにあり、ソファに座りながら学術雑誌を読んでいると、昼には川沿いをジョギングする多くの人々、夜には対岸のボストンの高層ビル群の夜景やレッドソックスの本拠地、フェンウエイパークの照明なども見ることができます。ラボからとても近かったので、実験の合間に来てはいろいろな学術雑誌を読んだり、英語がイヤになると日本語の学術雑誌を読んだりと、私にとっては憩いの空間でした。

私の場合には実験が研究の中心にあったため、あまり積極的には図書館を利用しませんでしたが、利用した際に日本の大学図書館との違いを感じる点が幾つかあったので紹介します。まず、一番の違いは開館時間です。公式には「朝８時からミッドナイトまで」が開館時間ですが、図書館の一部の学習スペースは24時間開いていて、多くの学生がそこに籠もって勉強したり、レポートを仕上げたりしています。試験期間が近くなると、そこで寝泊まりしている連中もいて、歯ブラシとコップを持って図書館から出てくる学生に遭遇したこともあります。逆に、最も空いているのはクリスマスシーズンでしょう。この時期に撮った図書館内部の写真を載せます。このシーズンだけはキャンパス中どこも静まりかえっていたのが印象的でした。

また、図書館は単に図書を教職員や学生に提供するだけの施設ではなく、教育や研究に役立つものをいろいろ提供してくれます。例えば、館内には分子模型がたくさん置いてあります。本に載っている分子構造は平面的で分かりにくいため、構造を理解するのに分子模型は非常に強力なツールになりますが、それを図書館に置いておくと、学習効果がとても高くなると感じました。他にも、図書館はコースやグループ単位でのワークショップや講習会等のサポートを行ったり、様々な研究プロジェクトに関する専門家の紹介も行っています。私の滞在中、村上春樹の講演会がありましたが、図書館もその事業をサポートしたようです。

・・・・・・ 学内教員著作寄贈図書 ・・・・・・



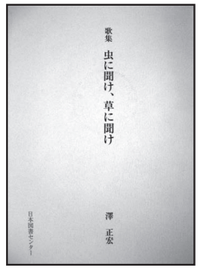
『ジェンダー学への道案内』
北樹出版　2006.10
髙橋　準著
請求番号：367.2/Ta33i

10年近い福島大学での教育経験をふまえて、"ジェンダー学"という言葉でとらえられる広範な領域のエッセンスを、敷居は低く、奥行きは広く、読んで楽しくわかりやすく、を心がけてまとめました。そのために、友人に頼んでイラストを描いてもらったり、ショートストーリーを章の始めに置くなど、いろんな工夫をしています。内容としては、基礎的な知識から、身近なメディア関連の問題、簡単な思想と運動の歴史、労働、家族、こころとからだの問題までを取り上げています。

また、これまで講義やゼミをしてきた中で学生の皆さんからもらった意見が反映されていたり、あるいはつまずきやすいところにはさりげなくフォローが入れてあったりしています。これからこの本もいろんな人に読んでいただいて、さらに充実させていきたいと思っています。

『日本版コンパクトシティ』
学陽書房　2007.2
鈴木　浩著
請求番号：318/Su96n

本書は、主としてヨーロッパにおいて、環境や自然等への配慮から「持続可能性」をキーワードとして構築された「コンパクトシティ」について、日本独自の背景・地域事情や、「まちづくり三法」をはじめとする法制度の展開過程をふまえながら、わが国でどう展開していくか、その考え方、実現方策を提示している。中心市街地空洞化、大型店問題をはじめ、都市計画のほか、コミュニティ再生、農村と市街地の有機的連携、住宅政策、公共交通マネジメント、地域循環型経済システムの構築など、多岐に渡る課題に対する考え方、対応策を提示している。



『歌集　虫に聞け、草に聞け』
日本図書センター　2006.11
澤　正宏著
請求番号：911.16/Sa93m

歌集のタイトルの「虫に聞け、草に聞け」という言葉は、「核兵器切り札ならば虫に草にまず問うてみよ地球の破滅」という拙歌からとりました。この歌は運よく2003年5月第4週の「朝日歌壇」で、選者の近藤芳美氏が第一席に選んでくださり、短い選評も頂いたので、そうか、悪い出来ではないのだと思い、自然と生臭い社会とが切り結ばれているのでタイトルにしたのです。もちろん、この歌集の基調はこの一首にあるわけです。

近藤芳美氏といえば日本の戦後を代表する歌人で、影響を受けた歌人も多く、短歌における社会性を強く主張した方だったので選んで頂けたのだと思います。現在もそうですが、この歌を作った頃も隣国の核兵器騒動の渦中にありました。しかし、この歌集は自然やその生命を歌った歌も多いのです。短歌も周囲の事柄を日々、観察日記をつけるような感覚で生きていくことの大切さを教えてくれます。数人の知り合いの方から、詳しい感想、批評も頂きました。40代から50代にかけての330首を収めたこの歌集が現在の私の心境のすべてだと思っています。

新図書館システム運用開始

利用者サービスチーム

本年9月より新図書館システムの運用を開始しました。

新図書館システムの利用者サービスにおいては、既に実施しているサービスに加え、新たに携帯電話、電子メールを介したサービスを提供いたします。

蔵書検索サービスにおいては、県内大学図書館及び一部公共図書館との横断検索を実現しました。これまで個別にそれぞれの図書館の蔵書検索を行っていたものを、1回の検索語入力で選択した対象館すべてを同時に検索するものです。この横断検索は本館ホームページ上及び図書館内のＯＰＡＣ専用パソコンから利用ができます。

また、学術機関リポジトリシステムも導入しました。本学で生産された紀要論文等をインターネット上に公開し、利用できるようにするものとして、本年11月試験公開、来年2月本公開予定で準備を進めています。

新図書館システムの主な特徴

1. Webによる利用者サービス
   ①予約図書の到着通知をメール配信
   ②携帯電話からの利用状況照会やＯＰＡＣ検索
   ③文献複写・相互貸借依頼
   ④図書購入依頼・照会（教員のみ）
2. 福島県内図書館横断検索
3. 学術機関リポジトリシステムによる研究成果の公開

『ＰＣエリア』オープン

情報化社会に対応した図書館サービスの提供

利用者サービスチーム

本年4月より1階開架閲覧室内にインターネット接続パソコン30台を配置し、「ＰＣ」エリアとして運用を開始しました。（写真）カウンターでの利用手続きは不要で、席が空いていれば、総合情報処理センター発行のＩＤとパスワードで利用ができます。

本学では教育研究等の質の向上をはかることを目的として、『学生が自由に電子情報に触れ学習機能を高める環境を作るため、図書館内にインターネット端末（パソコン）を配置したオープンフロアの設置を図る。』ことを計画しています。今日パソコンは、卒論・レポート等の作成のための情報検索及び文書作成、Web・電子メールの利用、授業履修登録、就職情報の収集など様々な目的に利用されています。

また、大学図書館は、高度情報化社会に対応した図書館サービスの提供が求められています。偉人が『図書館には、書物と心地よいイスと机があればよい』と言ったのは昔のことで、パソコンを利用した情報収集ができる環境が、閲覧室内にも必要な時代となりました。

このＰＣエリアは情報探索指導の場所として情報探索講座などにも活用していきます。利用者の情報検索のスキルアップに、ＰＣエリアをご活用ください。

附属図書館利用者協議会が開催されました。

附属図書館長　小沢　喜仁

附属図書館の図書館資料及び施設・設備の利用に関わって、利用者の便をさらに向上するために、７月４日に附属図書館利用者協議会が開催されました。

委員自己紹介の後に、3月に制定された「附属図書館の理念と目標」について紹介があり、「附属図書館の概要」をもとに図書館の蔵書等に関わる現状、県内大学図書館連絡協議会の活動報告、図書・雑誌受入冊数の減少の課題について説明し、学術情報のデジタル化に伴い新たな情報手段として注目されている電子ジャーナルの導入状況と利用紹介を行いました。広報活動の一環として、４月からリニューアルした図書館 Web ページの紹介等を行い、ポータルサイトとして利用サービスを強化していることを説明しました。昨年度より大学全体として取り組んでいる「学術機関リポジトリ」の構築についても説明しました。

協議においては、学生委員から、利用環境について『共同学習室・視聴覚室の利用状況が悪い。廊下を歩く足音や会話が聞こえることがあり、迷惑に思う』『ＰＣエリアができたために参考図書の利用が不便になった』『閲覧室２階の閲覧机は話し声がよく聞こえる』『自分の空間として使用している。「図書館に話をしに来る人は来ないでほしい」という学生もいる。図書館としては、譲歩することはないので注意してほしい』と意見が寄せられました。

図書館の利用においては、学術情報の利用・閲覧や、学術データベースや電子ジャーナル等の検索・利用などに加えて、最近では、学習教育環境の提供や「癒し」としての空間の提供が求められています。教員委員からもありましたが、学術情報の利用という軸を明確にしながら、学生にとって居心地のよい学習環境を整備したいと考えています。

また、教員委員からは、『図書館における快適な学習環境の提供が大きな役割であり、欲しい本が速やかに図書館で利用できるのであれば図書館は利用される。すぐに買ってもらえ利用できるようにできないか』『閉架書庫も開放してほしい』というご意見がありました。

これについては、図書館職員から『最短であれば３週間で入るが、高額なものは運営委員会に図る必要がある。利用者からリクエストを受付ける制度があるので利用してほしい』『現在は、１年生から書庫入庫ができるようになっている』と説明しました。

利用ガイダンスについては、『新入生ガイダンスで聞いたことは忘れてしまう。３年生などになって情報探索講座を受け、はじめて知ることも多い、書庫案内も行ってほしい』と要望がありました。

『図書館としては１年生次に新入生図書館ガイダンスを行い、情報探索講座は、定期開催とオーダーメイド開催など利用者の希望に応じて行っている。書庫案内も希望があれば加えることは可能です』と図書館職員より説明しました。

学術データベースや電子ジャーナルの利用について聞いたところ、学生委員から『先生から使って見なさいなどとの話しは、まだ２年生なのでない』、使ったことがある学生からは『１年の教養演習で情報探索講座を受けた、教員から言われ使ってみた』、教員から『今後重要なツールになると思うので、学生にも電子ジャーナルを使ってほしいと思っている』と現在の利用状況が明らかになりました。教員の働きかけは重要な刺激になると思われます。

国際化への対応について、院生委員より『いまのところ、留学生から施設面でわかりにくいとは聞いていない』、教員から『留学生がメンバーにいないので、利用者協議会に留学生も参加すると意見が聴けるのではないか』と述べられました。国際化を進めるためには英語などの外国語を使うことは不可欠であり、館内の案内表示やパンフレットなどを留学生のためにも４ヶ国語で標記するなど、国際化の問題について施設をさらに使いやすく改善する課題があります。

最後に、教員委員より、『開かれた図書館として、何か行うことが必要ではないか。開かれた大学図書館として、一ヵ月ごとに図書館に行きたくなる企画が必要ではないか』との意見がありました。現在、10月初旬から11月初旬まで「松川事件資料展示会」を、年末には「Gallery Concert 2007」を開催することや、利用改善のための環境整備などを計画しています。利用者からの声を受けとめて、よりよい学術情報検索や学習教育環境のサービスの提供を目指して改善していきますので、ご支援ご協力をお願いいたします。

福島大学学術機関リポジトリ講演会報告

IR推進部会

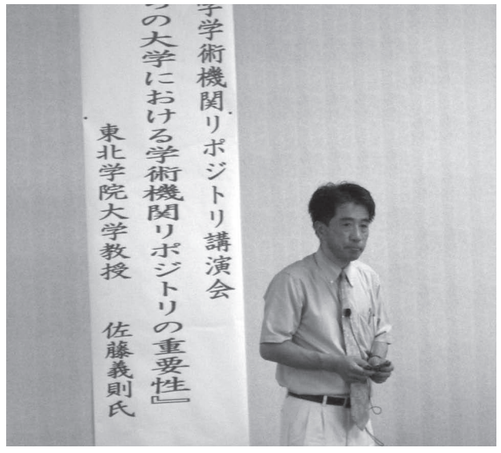
福島大学では、7月25日（水）学術機関リポジトリに関する講演会を開催しました。これは、国立情報学研究所で進めている次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業（CSI）の委託を受けて、現在本学で取り組んでいる機関リポジトリの構築のために開催したものであり、リポジトリ推進部会を中心として準備し、講演会には、教員をはじめ関係する部局からも多くの教職員が出席しました。

講演会には、講師として佐藤義則東北学院大学教授を迎え、「これからの大学における学術機関リポジトリの重要性」と題して講演が行われました。

講演では、機関リポジトリの背景、仕組み、オープンアクセスやグリーンジャーナルなど、リポジトリに関する基礎知識から効果まで、リポジトリの必要性について資料に基づいた幅広い内容で行われました。

講演後、参加していた教員から具体的事例を想定した意見や質問が出され、終了時間間際まで熱心に意見交換が続きました。

本学の学術機関リポジトリは来年２月公開を目標に構築を進めており、リポジトリ推進部会では、講演会を契機に各教員の理解と協力を求めるために、今後も広報活動を強化することとしています。



●学術機関リポジトリに登録・保存する学術コンテンツの例

◇学術誌掲載論文	◇テクニカルレポート	◇科学研究費補助金成果報告書
◇紀要掲載論文	◇プレプリント	◇教材（授業等で用いる資料類）
◇博士論文、修士論文等	◇ソフトウェア	◇実験記録等のファクトデータ等
◇学会等発表資料	◇その他、学内で生産されるさまざまな教育研究成果物	

こんなものがあったのか！

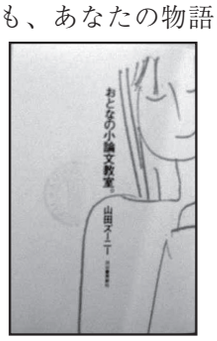
尾澤　喜絵（教育学研究科２年）

ある日、書庫内を特に目当ての本を探すでもなく探検（？）していた私は、なぜかある本に目がとまった。その名は『おとなの小論文教室。』…小論文なんて高校卒業を期に、ろくに聞く事はなくなったし、なぜ気になったのかわからなかったので「おとなの小論文って…どんなだ！」と大変涼しい書庫の中で一人つっこみを入れ通り過ぎた…。なのに、結局著者の名前（山田ズーニーというらしい）が気になり、なんとなく手に取ってしまった。今思うと著者にまんまとやられたのかもしれないが…。

この本には著者のズーニー氏自身の自由への戦いが記されているといっても過言ではないだろう。高校生に対して10年ほど小論文指導してきた過去をもつ著者は、彼女自身（女性であった！）の経験から人が自由に生きる要件として、「表現力」というものが必要だと述べている。例を挙げれば、表現力があれば遠くにいても人との距離は近く、関係把握が正しくできるから新しいことにも臆せず挑める自由があるというのだ。しかしなにも、彼女のいう表現とは本を書くだとか、芸術だとかの敷居が高いなと感じること、を言っているのではない。本の中でとりあげられているのは日常の人間関係の中で使われる言葉である。自分の心の言葉をくみ上げ言語化して自己理解する事も結局、自己表現とつながっているという。つまり、『自己表現』が表現力の大元なのだ。そこで彼女は自身の経験を題材にして「自分を表現する」ということを読者に考えさせようとしている。自分を表現するには自分の心を知らなくてはならない。自分の心を知るには、自分自身に対しに的確な問いを立て、答えを出す事が必要になる。つまり、自己表現には「考える力」が必要となるのだ。

思えば、私達は学校生活の中ではどちらかというとインプットとその応用が主で、「自分自身を表現する」練習はほとんどしてこなかったように思う。自分で意識しなければ、今後もトレーニングの機会はないのかもしれない。

最後に、この本にある数々の名言の中から著者の言葉を引用して終わりたいと思う。『出来あいの言葉で物語るより、あなたの五感を使って本当に感じ、想ったことを言葉にするほうが、きっと何倍も、あなたの物語は素晴らしい』



「おとなの小論文教室。」
河出書房新社　2006.1
山田　ズーニー著
請求番号：816/Y19o

目　　次

●巻頭言「編集者という職業」……飯田　史彦（1）
●思い出の一冊『なぜ「表現の自由」か』……金井　光生（2）
●「カウンターの内側から」……郝　　鋒（2）
●「海外の図書館事情」（マサチューセッツ工科大学）……大山　　大（3）
●学内教員著作寄贈図書の紹介
『ジェンダー学への道案内』……髙橋　　準（4）
『日本版コンパクトシティ』……鈴木　　浩（4）
『歌集　虫に聞け、草に聞け』……澤　　正宏（4）
●新図書館システム運用開始……利用者サービスチーム（5）
●『ＰＣエリア』オープン……利用者サービスチーム（5）
●利用者協議会開催……小沢　喜仁（6）
●リポジトリ講演会報告……ＩＲ推進部会（7）
●こんなものがあったのか！……尾澤　喜絵（8）